

研究

中島子玉著「日本詠史新樂府」(二)

解説・挿絵 佐藤 巧

編集・校正 鶴野博文

(会員)

破流鬼 (源為朝の豪勇)



(樂府詩)

丈夫何借王家爵

吾是鎮西八郎足

箭長幾許十五扶

百步無物逃我鏃

(読み下し文)

丈夫何ぞ王家の爵を借らん

吾は鎮西八郎にて足れり

箭長幾許ぞ十五扶なり

百歩我が鏃を逃れるものなし

射船船覆射馬馬仆 船を射れば船覆り馬を射れば

馬仆る

電光一掣如星落 電光一掣星落つるが如し

阿兄休笑吾弩弱 阿兄笑うを休め我が弓の弱さを

末力能破流鬼国 末の力能く流鬼国を破らん

(語釈)

・流鬼 琉球のこと

・丈夫 一人前の男子

・掣 (弓を) ひく

(通釈)

一人前の男が、なんで王家(朝廷)の官位など借りようか、自分は鎮西八郎で充分だ。

矢の長さはいくらかと言えば十五扶、百歩の間わしの矢を逃れる者はおらぬ。馬はおろか、一矢で船さえ転覆する。電光のような速射で、星が落ちるように命中する。

兄さんよ、今俺の弓が弱いからと言って、笑うのは止めとけ、末は琉球でも征服できるようになるから。

(漢文解説の読み下し文)

為朝は為義の第八子。その幼きに諸兄を凌轢す。為義怒り、これを西海に放つ。豊後に居り、肥後の平忠国と相謀り、西に侵し、大小二十余の戦いに皆勝ち、遂に九州を覇す。自ら、鎮西八郎と称す。時に年十三。

保元の役、頼長、その用いられざるを恐れ、俄に奏して藏人を授けんとす。為朝曰く「死亡之れ違あらず。尚、藏人を以て何と為さんや。身は鎮西八郎にて足れり」と、押せず。

為朝、鳴鏑を注え義朝を射し、これを嚇さんとす。箭飛び声をなして兜臍を撃ち門扇を貫く。義朝曰く「汝、唯、未だ精しからざるのみ」と。為朝曰く「兄弟の以なり」と。

乃ち復び(大箭を)注う。深栗七郎、義朝を敵い、弦に応じて斃る。

後、伊豆大島に流され、悉く其の租賦を奪い、また傍地を略し、これに有る島、六島を併す。

嘉応二年に至り伊豆守茂光之を討たんとす。為朝邀え射てその戦艦を沈む。

或る人言う、後に流鬼国(沖繩)に入る、所謂、舜天王

は則ち為朝の子なり、と。

(語釈)

凌轢 あなどり、ないがしろにする。

藏人 宮中の官名、天皇に近侍、雑用をする五位、

六位の者、出世の機会多く人気のある官職

鳴鏑 鏑矢、音をたてて飛ぶ。

(口語通釈)

源為義は、義朝以外の子供を引き連れ敗北した崇徳方に付いたが、その八男が為朝で、幼い時から人並みをはるかに超えた体格と腕力のせい、か兄達をあなどり、ないがしろにしていた。為義は怒ってこれを追放した。

九州の豊後に居着くと、肥後の平忠国と共謀、西に向かつて侵略し、大小二十余戦皆勝つて遂に九州を制覇、自ら、鎮西八郎と称した時は僅か十三才。

保元之役では、同じく崇徳方、左大臣藤原頼長が、為朝が若過ぎて用いられないかもしれない、と気をまわし俄に為朝を藏人に奏上しようとした。

ところが、為朝は「死を目前に賭して戦わんとする者、

今更蔵人をもつてなんとする。自分は鎮西八郎で不足なし」と言つて断つた。

只一人敵となつた後白河方の義朝(為義の嫡男)を嚇さんと、為朝は鎬矢を射かけると、物凄い矢音を発して義朝の兜の真中にあたり門扇を貫いた。義朝が「おまえはまだ未熟だ」というと為朝、「兄弟と思う故だ」と。

そこで、今度は(大箭を)つがえると、深巢七郎がとつさに義朝をかばい弦音とともに倒れた。

義朝は只一人勝組だったが、敵側に付いていた父をはじめ多くの兄弟を処分しなければならぬ羽目になるが為朝は朝廷がその武勇に免じて肘の筋を抜いて伊豆大島に流罪とした。

ところが、為朝は大島は自分が朝廷から賜つたものだから、全ての税を奪い、付近の六島も占領併合した。

嘉応二年伊豆守茂光これを討とうとすると、為朝これを邀え、一矢で敵の戦艦を沈めてしまった。

ある人(頼山陽など)たちは、「為朝は生き延びてその後琉球に渡つた。所謂、舜天主は、つまり、為朝の子である」と伝えている。

(編集メモ)

この度、編集委員の戸高厚司氏より、この「新楽府」とほぼ同じ頃に出版されたと思われる「日本詠史集詳解」を紹介された。著者は頼山陽をはじめ、廣瀬淡窓、弟の旭莊かんちやざん、官茶山、篠崎小竹など、当時の西日本の有名文人の多くが名を連ね、主題は頼山陽の「日本外史」に基づくものが多い。「佐伯史談」で現在進行中の主題については源氏最員が共通し、為朝や義経の生存説などその一例として含まれている。

伊勢瓶子(平家繁栄の端緒と没落)



(楽府詩)

(読み下し文)

伊勢瓶子醋瓶(眇)子

伊勢の瓶子(平氏)は醋瓶すがあなり

瓶子壹廟堂器

瓶子あに廟堂の器たらんや

他日公卿集一門

他日、公卿一門に集まる

承乏台鼎還瓶子

台鼎に承乏するも瓶子に還る

瓶子倒覆公餽

瓶子倒れて公餽覆る

痛心不独公餽覆

心痛むは、ただ公餽覆えるのみならず

餽中哀哀一塊肉

餽中哀哀たり一塊の肉

(語釈)

・醋瓶子

素焼きの徳利、酢をいれる壺から平氏と忠盛の眇(片方の目が見えないとか小さいなど)をあてこすっている。

・他日

この後の日、後日。

・承乏

(しょうぼう、官につくことの謙称)

・台鼎

(たいてい 三公、太政大臣、左右大臣)

・鼎

(かなえ) 三本足の中国古代の銅の聖器、王位や高い権威のしるし、公餽はそれに盛った

神への供物、このことから「鼎足を折り公餽を覆す」(大臣が其の任に堪えず国政を乱す) という諺があり、これをもって平氏の国政関与の失敗を風刺している

・餽中一塊肉

「鼎の中の一切れの肉」(鼎の中の一切れの肉を味わえば鼎の中全体の食べ物(餽)の味がわかる。)

(通釈)

伊勢の田舎者の平氏が何で朝廷にふさわしい人材であるか、この眇の忠盛めが、といつて嘯している間に、公卿の頭官は平氏一門に集中してしまった。

しかし、三公にまで昇りつめた瓶子(平氏)は倒れ、その地位(公餽)も覆るだけでなく、悲しむべきは国政の試練に耐えなかつたことである。

(漢文解説読み下し文)

清盛の系は伊勢より出づ。父忠盛鳥羽帝に事え寵あり。備前の守より但馬守に遷り、刑部卿に任じられ、昇殿を賜う。

その門望の微なるを以て、縉紳多くはこれに伍するを愧じ、寡に乗じこれを刺さんと謀るに、語泄れ期に及び忠盛刀を佩して入る。その親兵も亦哀甲して馬に従う。

衆、謀破れ、すでに宴、闌なり。帝、忠盛に命じ

て起ちて舞わしむ。

衆乃ち為に声を軋じて曰く「伊勢の瓶子は醋瓶なり」と。瓶子と読み「平氏」と作し、醋瓶の諺音を「眇」と混同し、忠盛の目眇なるを調る。

仁安二年、皇子憲仁を立て、皇太子となす。太子の母は清盛の妻の妹なり。後太子立ち高倉帝となる。

清盛内大臣に遷り従一位に陞る。清盛またその女を立て皇后となす。一時の榮貴ともに比すものなし。

治承元年、左近衛大将闕（欠）し、大納言寶宗成親、これを求むるを管らんとするも、既に重盛、自ら、右（大臣）より左に遷り、是において二人ともに平らかなること能わず、其の党西光と共に乱を作さんと欲し、鹿谷に會議す。鹿谷は僧俊寛の山莊なり。

座に諫むる者あるも、成親、毅然として立てば袂、瓶子を背にこれを倒して曰く「平氏斃る。之れを斃すは首を取るにしかず」と。遂に瓶首を取りて退く。

その党に行綱というものあり、禍の及ぶを懼れ密かに清盛に告ぐ。乃ちその党を捕らえこれを罪す。

壇浦之役、二位尼、安德帝を抱き蹈海して殞し、諸盛も亦戦没す。

（語釈）

- ・門望の微 家柄が低く卑しい。
- ・縉紳 高位高官の人。
- ・衷甲 服装の内側に甲冑。
- ・声を軋じて 調子を変えて。
- ・寶宗 名家。
- ・殞 君主の死をはばかって「殞す」（死す）。
- ・蹈海 海に身をなげる。

（通釈）

清盛の系統は伊勢の出身で、父忠盛は鳥羽帝に事え、大いに寵愛され備前守より但馬守に遷りついに刑部卿に任じられ昇殿を賜るが、その家柄が低く卑しいとして、高位高官のものはこれと交際することを恥とした。そこで昇殿の際、護衛の少ない時に乗じて暗殺せんと謀つたが、事前に事が漏れ、忠盛は佩刀（帯刀）して入り、供の者は下に甲冑を着込んで馬に従う。

謀りごとは失敗、すでに宴たけなわ、帝が忠盛に「立つて舞え」とおっしゃると、公卿衆、急に調子を変えて「伊勢の瓶子（平氏）は醋瓶（眇）の瓶子」と囃し忠盛を嘲つ

た。

しかし、清盛の妻時子の妹滋子が後白河帝の妃となり、皇子憲仁（高倉天皇）を産むや平家の大躍進が始まる。清盛は内大臣に遷り、従一位にのぼる。さらに、清盛の娘徳子が高倉帝の皇后に立つと、一時の榮貴は、周囲の妬みとともに絶頂に達する。

治承元年（一一七七）左近衛大将の官が欠員となった。撰閑家につく名家出身の藤原成親（権大納言）は、後白河院の第一の近臣で妹は重盛の妻だったのだが、かねて切望していた大将の席は重盛に一足先に取られてしまう。

資格の上の自分を対等を超えて下に処遇されたと憤る成親は一派の西光（藤原師光）らと、鹿谷の僧俊寛（法勝寺の執行）の山荘で平家討伐の会議をする。

諫める者もあつたが、成親が毅然と立ち上がったはずみに瓶子が倒れた。西光が「平氏の首はとるほかはない」と言つて、その瓶子（徳利）の首を取つて引き下がった。一派に源行綱と言う者がいたが、禍が及ぶのを恐れて清盛に密告し、一派は捕らえられ断罪された。

しかし最後には、壇之浦で二位の尼（徳子）は安德帝と共に入水、盛名を持つ平氏の者も戦没してしまつた。

着高履（高履を着く）

（西光の断罪と清盛の死）



（楽府詩）

（読み下し文）

高平太着高履

高平太高履を着く

中御門前足踏踏

中御門前、足踏踏す。

一旦黒鼠化為虎

一旦黒鼠化して虎と為るや

棄履乘輦願未不足

履を棄て輦に乗るも願未だ足らず

願未不足竟如何

願未だ足らざれば竟に如何せん

君爵更有老閻羅

君爵も更に老いては閻羅あり

夜叉又相送大輪車

夜叉、また大輪車を相送らん

（語釈）

・中御門 藤原北家（関白家）の称

・蹠踏きよくせき

ぬきあし、さしあし、恐る恐る歩く。

・黒鼠 清盛の生まれ年は子年（鼠年）をいう。

・輦 天子の車。

・閻羅 閻魔羅閻の略、地獄の王。

（通釈）

清盛、貧困不遇の時代、いつも高下駄をはいていたが藤原権門邸の前では、びくびくして歩いてきたものだった。それが、鼠が虎になったかのような急激な大出世、下駄から輦へ乗り移ったが、頂点を極めるといふ願いにはまだまだ不足だ。

しかし、まだ不足ならどうしようというのだ。君爵高き者も老いては等しく閻魔王が遣わす夜叉の大輪車の迎えがあるというのに。

（漢文解説読み下し）

清盛、西光を縛して至り、階下に跪ひざまづかして曰く「下奴、過分の寵たのを恃み、吾が家を危うくせんと欲す」。

西光、笑つて曰く「何をもつて過分と謂うか。公の父但馬守、朝官として齒はに愧はづべき所なり。公はその嫡子たる

も常に高履をはき、中御門氏に伺候す。人呼んで「高平太」と。今、太政大臣に至るこそ「過分」といふ耳のみ。清盛大いに怒り命じてその口を裂かしむ。

清盛の生まれ歳は子ね（鼠）に在り、耶馬台歌に謂う所の黒鼠くろそはこれなり。

清盛従一位にのほり、輦に乗りて宮に入るを許さる。

養和元年（一一八一）二月、煩熱を患い冷水に浴せば水すなわ軋なち沸し叫号の声門外に徹りて曰く「閻羅、大輪車を遣わし我を迎え取らしめんとす」と。

病むこと七日にして薨こうず。歳六十四なり。

（語釈）

・齒 年齢をいう。ここでは年功・順序を超えての意
・輦なち そのたびごとに。

（通釈）

鹿谷会議の首謀者西光、捕縛されて清盛の足下に跪ひざまづかされる。清盛、「この下奴、院の過分の恩寵を恃たのんでわが平家を危うくせんとは」と言えは、西光笑つて「公の父が年功序列を超え、但馬守などと言ふのささえも恥はすべきに、

嫡子のそなたも、ほんのこの前まで恐れ入り乍ら権門に伺候し、「あれが高下駄の平太か」と皆に笑われていたのが今や、太政大臣とは。これこそが「過分」というものだ」と言い返した。清盛は激怒して西光の口を裂くように命じた。

清盛従一位にのぼり、輦に乗ったまま宮中に入ることを許されるまでに、史上異例、破格の出世を遂げた。

養和元年（一一八二）二月、大変な熱病にかかり、石槽ふねに水を盛って入浴させると、そのたびに沸騰して病苦の叫び声は門外まで達した。そして「閻魔が夜叉を遣わしてわれを迎え取らせようとしている」と叫びながら、苦しむこと七日間、六十四歳で薨じた。

靡夕日さしまね（夕日を靡いて、朝日を呼び込む）



（楽府詩）

靡夕日

君扇能擬魯陽戈

義和弭暫婆娑

射朝日

君箭不及后羿弓

王室如燬勢熾々ちゆうちちゆう

家祭不供流人首

児曹之祀吾豈受

誰凶君宗与日亡

棒日却是流人手

（読み下し文）

夕日を靡く

君扇、能く魯陽の戈ほこに擬す

義和弭を弭め、暫く婆娑し、

朝日を射たり

君箭（扇）后羿こうげいの弓に及ばず

王室は燬（烈火）の如く勢い熾々

家祭に流人の首を供えずんば

児曹の（祭）祀吾豈受けんや

誰か凶らん君宗、日と与ともに亡び

日を捧づるは却かえってこれ流人の手な

りしを

(編集より補助解説)

今回の楽府詩では典故の引用がやや複雑なので、文意の理解のため、故事解説を先行させていたたく。

①魯陽の戈、中国戦国時代、楚の魯陽公、韓との戦いに日暮れんとし、沈む太陽を戈で引き戻したという。

②中国太古伝説の時代、天帝の十人の子供は太陽だった。その母親は義和と言い、六頭の竜に曳かせた車を御し、太陽を毎日一個ずつ乗せ、東から西へ決まった行程を通過する途中、悲泉という所で、竜を解き放し義和も散歩しながら(婆婆)休憩する。(淮南子)この間に清盛が朝日(將軍木曾義仲)も招き入れてしまった。官茶山も「魯陽日を回すの手、却つて魔く朝旭一將軍」と言っている。(「日本詠史集」)

③同じく、堯の時代にこれらのお日様達が、わがままから一度に十個現れるという大事件が起き、地上の人民を早魘で苦しめたので、堯は弓の名人羿公に命じて一人一人を残し、九つを仰射せしめた。

以上、三つの故事が清盛の言動や平家没落の背景に簡潔な言葉で配置されている。

(通釈)

清盛、厳島神宮造宮の折、遅れを取り戻そうとして沈もうとする太陽を扇であおぎ返したという話は「魯陽の戈」に例えられるが、太陽神が休んでいる間に、朝日も招きいられてしまい、君扇も羿の弓には及ばなかった。

義仲を迎えた朝廷は烈火のような勢いなのに、我が平家はどうだ。頼朝の首が無ければ清盛家の祭りや供養をなんで受けられようぞ。

しかし、厳しい期待に反し、平家は落日とともに亡び、日の恵みが流人の手に移るのを誰が予測できただろう。

(漢文解説の読み下し文)

清盛嘗て厳島の祠を営る。限るに一日を以てす。功未だ終わらざるに、日没せんと欲す。乃ち扇を以て之を魔く。日為に一竿を退く。

魯陽公、韓と難を構え、戦い酣に日暮れ、戈を援りて之を揮う。日、三舎を反す。「淮南子」に出づ。日々御すも之を義和という。「広雅」に出づ。

堯、羿に命じて十の目を仰射せしむ。九つに中つ。亦「淮南子」に出づ。

御鳥羽帝、義仲を以て朝日將軍となし京に入らしむ。士卒を縦に大掠せしめ、途に衣食を奪うに至る。

清盛、死に臨み遺言して曰く「我が死の後、冥福を修ること勿れ。唯、頼朝の首を斬り、塚上に梟せよ」と。

(通釈)

清盛、厳島神社の造営中、あと一日限りというところで作業が終わらなかつたので、扇で日を麾いたところ、一竿分戻つた。魯陽の場合は三舎(約三十六キロ米)ほど戻した、と「淮南子」にある。

羿が日を射るに際しては、全部射落とすとまた人民が困るので、一本だけ予め矢を抜いてあつたという。

一一八一年清盛が死ぬ前後二、三年が源平交代の激動期にあたり、八〇年義仲挙兵(「朝日を射る」が急激に勢力を伸ばすと、八三年、朝廷は平家の官位剥奪、五百箇所の所領を没収して義仲と行家にその一部を恩賞として与えている)。

この時点から、王室(朝廷)は平家の束縛から解放され「烈火の勢い」を取り戻し、義仲の勢いを利用して平家を西海に追放し、義仲が邪魔になれば頼朝にこれを討たせ

るなど本来の権威を復活した。

清盛は死ぬとき、これらを充分予感できたらしく自分の死後、「冥福を祈つたりはするな。唯、頼朝の首だけを我が墓の上の柱に縛りつけよ」と子孫のやるべき事を厳しく衷心から期待して死んでいった。

併しながら、「日とともに亡び」とは、招き寄せた朝日將軍(木曾義仲)と共に平家は亡び、まさか取るに足らぬあの僻地の流人(源頼朝)が太陽の輝きを受けようとは。一一八五(文治元年)壇ノ浦で平家滅亡。

(語釈補遺)

・熾々 あつい、早熟、やく、ふすべる

・十五扶 扶は手の指を四本並べた長さ、為朝は身の丈七尺、かりに掌の幅一〇センチでは一五〇センチの矢。

・三舎 軍の一日の行程三十里が一舎(周代一里＝四〇五米)で十二・五キロ米、その三倍の距離。